現代アートによる地域再生

2026/3/9

株式会社ベネッセホールディングス　名誉顧問
公益財団法人福武財団　名誉理事長
瀬戸内国際芸術祭　総合プロデューサー
越後妻有アートトリエンナーレ　特別顧問
福武　總一郎

企業とアート

企業の社会貢献と財団設立

1985年　財団設立のために福武書店の株を出捐

　　東京　　福武学術文化振興財団　ー①

1986年　岡山　　福武教育文化振興財団

2004年　直島福武美術館財団　ー②

2007年　文化・芸術による福武地域振興財団　ー③

2012年　公益財団法人　福武財団設立（①②③の3財団を統合）

第2次CI

（1990年）

「Benesse」の導入

bene（よく） ＋ esse（生きる）

Benesse ＝「よく生きる」

ベネッセアートサイト直島

企業理念「Benesse　よく生きる」を体現する場
瀬戸内海の直島・豊島・犬島を舞台に、ベネッセと福武財団が展開するアート活動の総称

歴史

1990年代～ 工業公害で荒廃した島々を
アートの力によって再生

特徴

❶　アート・自然・建築の三位一体
❷　地域住民やコミュニティが主体的に参加
❸　「よく生きる」の意味、深い内省を迫る

年間訪問者は 1万人(1990年)→約 80万人(現在)

直島新美術館

写真　GION

Copyright Benesse Corporation. / Strictly Confidential.

企業向けサービス

【推奨】人財育成×アート思考（対話型鑑賞）の活用

対話型鑑賞の効用

非認知能力（観察力、発想力、想像力、コミュニケーション力等）養成に大いに役に立つとされている。

ベネッセグループでは、対話型鑑賞の人財研修での活用が進み、運用者＝ファシリテーターのスキルをポータブルスキルに認定して推奨。（目標社内ファシリテーター300名）社外の学校・企業への研修提供実績も多数。

▼ベネッセグループ内での研修活用の変遷

2010年　（公財）福武財団にて李禹煥美術館の鑑賞プログラムとして導入

2018年　（公財）福武財団　エデュケーションセクション発足
アート×学びプログラムの開発を本格始動

2021年　ベネッセコーポレーション　人財部門主管研修に採択
（新人、3年目、中途社員）

2023年　ベネッセスタイルケア　保育部門の研修に採択

その他、ベネッセスタイルケア　介護施設でのワークショップ展開、
社外の学校・企業・団体への研修を数多く提供。

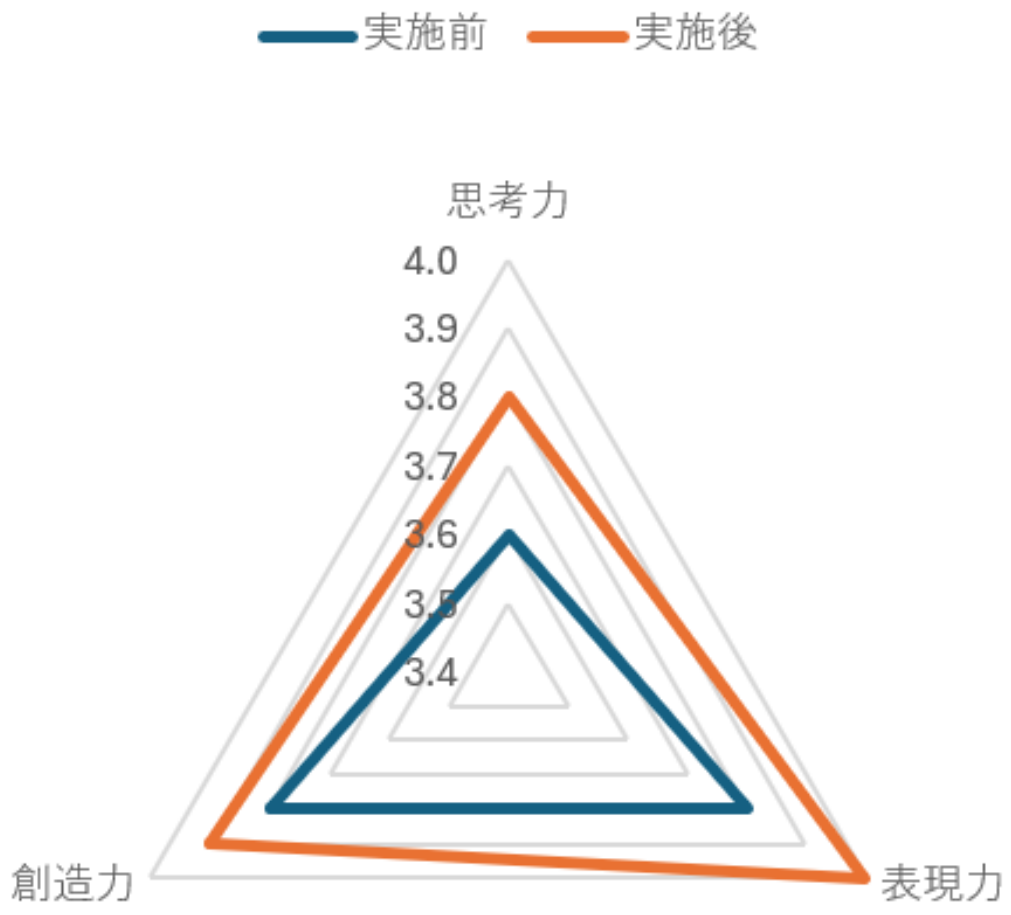
▲ベネッセ社員研修での対話型鑑賞実践の様子

対話型鑑賞とは：1980年代後半にMoMA（ニューヨーク近代美術館）で始まった鑑賞教育プログラムVisual Thinking Strategy（VTS）を基盤にした、
アート鑑賞を通じてグループで互いの感想や意見を語り合い、「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」などを育成する鑑賞手法。

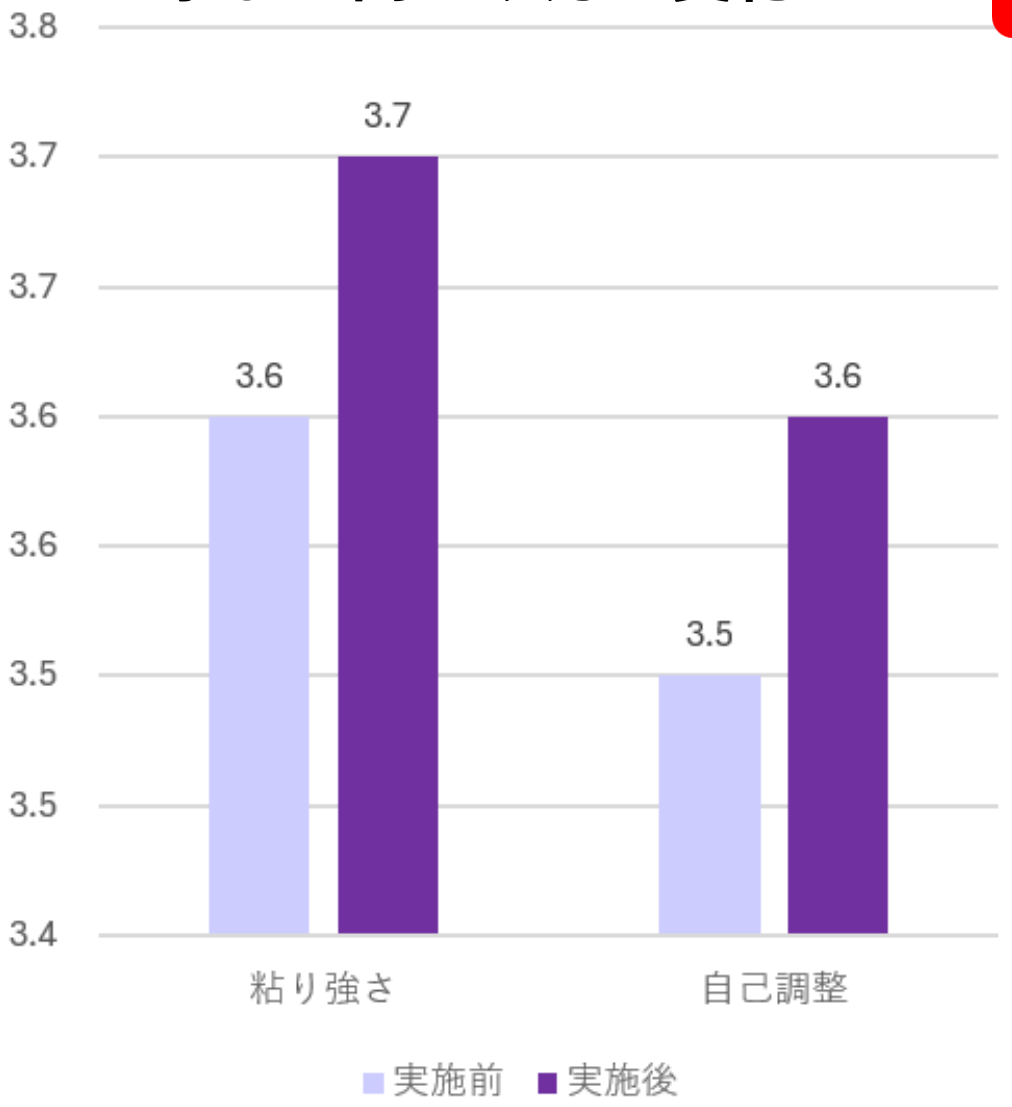
参加者の変化～非認知能力分析

新卒3年目

思考力・創造力・表現力の変化



学びに向かう力の変化



©Benesse Corporation Ltd.

SETOUCHI企業フォーラム（2025）

「企業とアート」、「社会課題とアート」、「地域とアート」
協賛企業、サステナビリティ経営に関心の高い企業の経営層が参加。協賛企業数261社
対話により、アートが企業活動や地域社会にもたらすものと企業ができることは何かを考える。

パートナー企業

SETOUCHI*
ART
& INDUSTRY
瀬戸内産業芸術祭

産業を、文化へ

芸術とは本来、絵画であれ彫刻であれ、日常を違った視点で見せてくれるもの。何気ない日常の風景も、絵画にすることで、いつも見ている景色が違って見える。日本の産業を支える工場も、違った視点で見せることで、アートとなり、訪れた人の感性を揺さぶる体験となる。瀬戸内産業芸術際は、「産業芸術」をコアコンセプトに、**工場が主役の分散型美術館**を実現します。

モニタツアー参画企業＆作品例（2025年1月開催）

株式会社パワーエックス

日本のエネルギー自給率は12.6%と低く海外依存が続く中、パワーエックスは国産エネルギーの拡大を目指し、大型蓄電システムを中心とした製品とサービスを提供しています。目に見えない電気を可視化する作品を特別展示いたします。

株式会社宮原製作所

瀬戸内は、古くから造船の歴史が息づく地域であり、多くの造船会社や関連サプライチェーンが集積しています。宮原製作所もその一社です。巨大な製品を1ミリをさらに下回る超高精度で仕上げるその技術力は、日本が誇る緻密さと高品質を体現しています。

ナイカイ塩業株式会社

瀬戸内の産業史において、塩はこの土地の風土を生かした象徴的な存在です。ナイカイ塩業は、その価値を体現する企業といえます。塩田時代から受け継がれる技術を礎に、殺菌処理に頼らず、自然の力を生かしながら安全な食塩へと仕上げています。

瀬戸内産業芸術祭は、「産業芸術」をコンセプトに、瀬戸内エリアに広がる様々な産業を新しい観光の形・体験の場として提供し、ものづくりの楽しさ、素晴らしさを未来の世代へ繋いでいきます。

岡山を中心に瀬戸内エリアの複数県から参画予定

2026年秋、第一回開催予定
開催概要は4月下旬に公開予定

アートと地域社会

個性と魅力溢れる地域の集合体

自然こそが人間にとって最高の教師
Nature is the best teacher

在るものを活かし無いものを創る

Use what exists to create what is to be

経済は文化の僕(しもべ)
The Economy must serve Culture

アートが地域を活性化させ人々を覚醒させるには

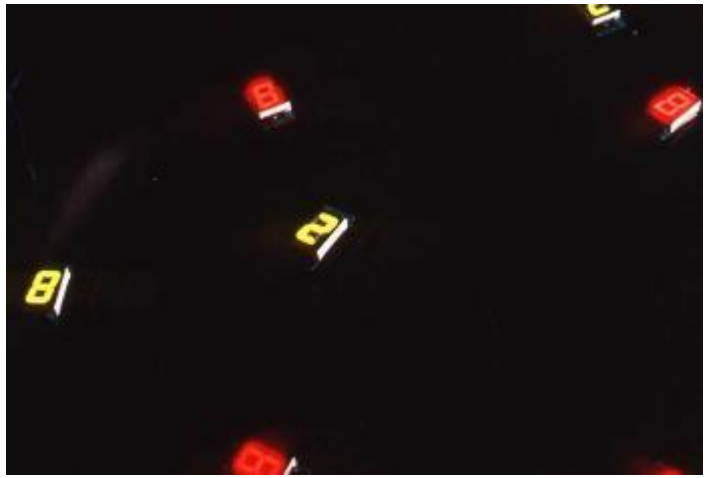
自然 ＋ 環境 ＋ アート ＋ 建築 ＋ 人々

杉本博司“タイム・エクスポーズド”　写真：安斎重男

ヤニス・クネリス“無題”　　写真：渡邉修

瀬戸内国際芸術祭2025開催地域

家プロジェクト「角屋」



宮島達男
「Sea of Time ‘98」(1998)

瀬戸内国際芸術祭　豊島　塩田千春作品

Photo: Osamu Nakamura

「遠い記憶」(2010)

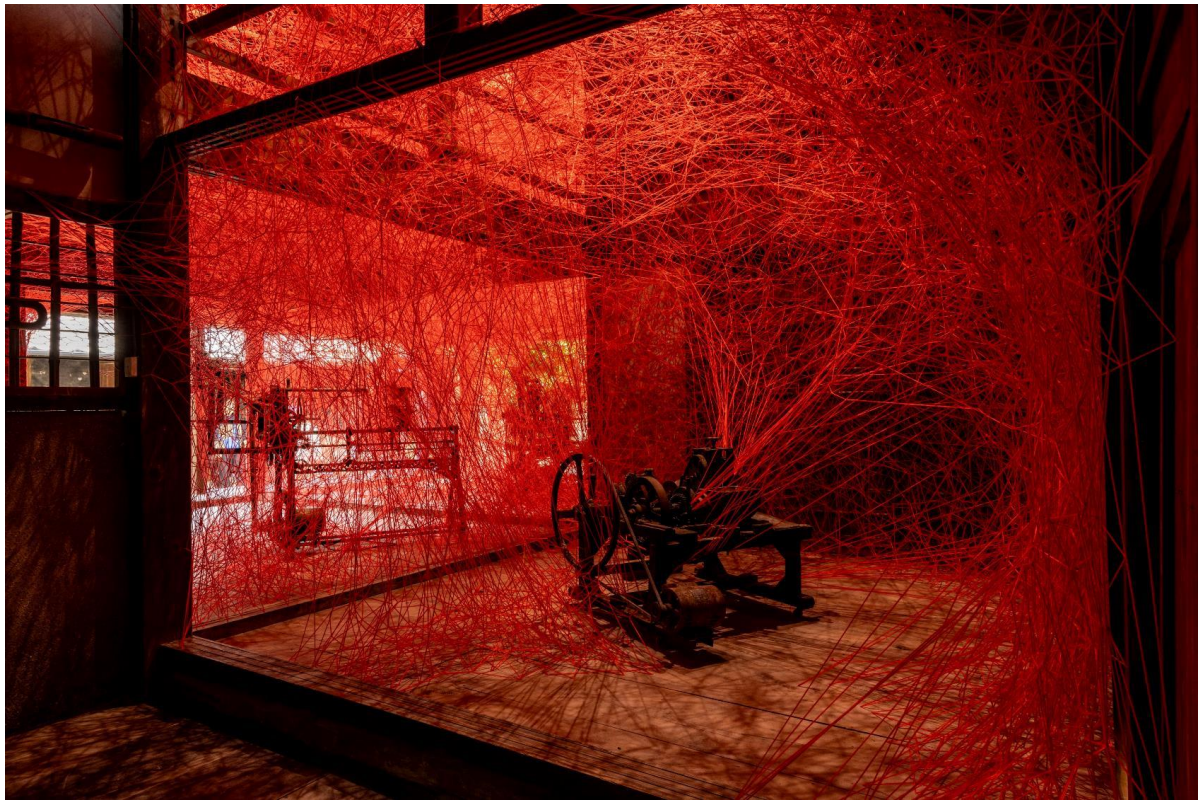


Photo: Shintaro Miyawaki

線の記憶 (2025)

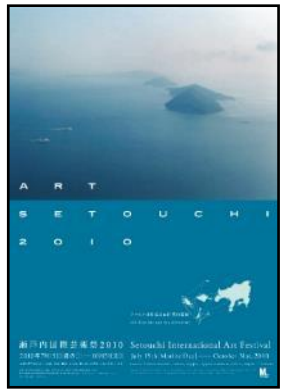
瀬戸内国際芸術祭の過去の実績

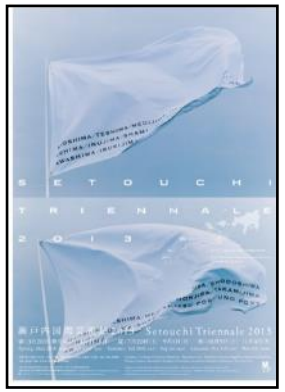
コロナ

	2010年	2013年	2016年	2019年	2022年	2025年
会期	7/19-10/31 計105日間	春3/20-4/21 夏7/20-9/1 秋10/5-11/4 計108日間	春3/20-4/17 夏7/18-9/4 秋10/8-11/6 計108日間	春4/26-5/26 夏7/19-8/25 秋9/28-11/4 計107日間	春4/14-5/18 夏8/5-9/4 秋9/29-11/6 計105日間	春4/18-5/25 夏8/1-8/31 秋10/3-11/9 計107日間
会場	7島 高松港	12島 宇野港+高松港	12島 宇野港+高松港	12島 宇野港+高松港	12島 宇野港+高松港	17エリア
来場者数	約93万人	約107万人 海外2.6%	約104万人 海外13.4%	約117万人 海外23.6%	約72万人 海外1.3%	約108万人 海外23%
男　性	35%	33%	32%	31%	36%	36%
女　性	65%	67%	68%	69%	64%	64%
ボランティア サポーター総数	約8,500人	約7,000人	約7,000人	9,458人	5,417人	9,970人
経済波及効果＊	111億円	132億円	139億円	180億円	103億円	195億円

＊瀬戸芸実行委員会と
日本銀行高松支店 試算

会期は3会期100日間
来場者は100万人前後が適正規模
海外比率は増加傾向（2022を除く）





地方都市の新インフラを起点とした発展

瀬戸内国際芸術祭を起点に中心部の再開発が進んだ高松市の様子

▼高松港周辺（2025年に新アリーナ完成）

妹島和世＋西沢立衛/SANAA「香川県立アリーナ（あなぶきアリーナ香川）」
写真：香川県提供

▼高松丸亀町商店街

提供：高松丸亀町商店街振興組合

瀬戸芸美術館連携プロジェクト（広域連携事業）

大原美術館

岡山県立美術館

横尾忠則現代美術館

兵庫県立美術館

直島新美術館

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

高松市美術館

香川県立ミュージアム